

座談会 「生徒が主体的に考えるための問い」の工夫とは？

生徒が主体的に学ぶための問いづくりをしようと意識し、そのための手法を活用して考えても、気が付くと、生徒の問題意識や関心から離れた問いになってしまっていることはありませんか。

ワークショップでは、そうした課題も上がりました。

教師主体ではなく、生徒主体の問いとするために、こういった留意点や工夫があるのか語り合いました。

※発言者は教科名で示しています。

「問い」の前後に考える材料を与える

国語 単に「育てたい生徒像」や「単元の授業の目標」を基に考えても、教師目線の問いになりやすいと感じています。生徒をいかに引き込むかを考え、例えば、生徒の日常生活と関係がある問いにすることもあります。

理科2 理科を苦手する生徒は多いので、導入の問いでは、身の回りのことに置き換えた問いにしています。物理では、「摩擦がなくなったら困ることはない？」と問いかけ、生徒に「困った」「大変だ」といった感情を思い起こさせ、なぜそう思ったのかを考えさせるといった具合です。

数学 数学でも、苦手な理由に最初から考えない生徒が少なくありません。そうした生徒が取り組みたくなくなる問いを考えると、「数学を使わなくても考えられる問い」であり、お二人が言う「生活に関連した問い」や「感情を想起する問い」になると思いました。

国語 教科の得意・不得意にかかわらず、生徒が考えたいという問いがよいとは思いますが、例えば、現代文では、作品のテーマに関心がなければ、興味を持たない生徒もいます。誰もが関心を持つ問いづくりに難しさを感じます。

理科1 問口の広い問いにすると焦点がぼやけて、面白くない問いになってしまうかもしれません。一方、よい問いだとしても、生徒がそれに取り組めなければ意味がありません。とすると、問いの前後に考える材料を与えるというのも、一つの方法ではないでしょうか。その教科に関心がなかったり、苦手だったりして、考えるペースのない生徒でも、何が問われているのかをイメージしやすくしたり、知識を補ったりすることで、問いに取り組むスタートラインに立てるはずですよ。

国語 生徒の集中力も関係があると思います。私は「中学1年生の男子」が取り組むことを想定しています。その年頃の男子でも集中して考えられれば、ほかの生徒も取り組めるだろうと考えています。特に、体育の後の授業でも関心を引きつけるためにはどうすればよいかは難問です。

理科1 「物理基礎」のオンライン授業では、「効率のよいバトンパスは？」という問いで、実際にリレーでバトンパスをしているシーンの動画を見せました。問いと一緒に、その問いを具体化した動画を提示することで、生徒が運動に関心を持てる導入になりました。何を問われているのか理解できるといった点でも、視覚に訴えるのは有効だと感じました。

理科3 「問題が解けた」という自己効力感があれば、少なくともその教科を嫌いにはならないはずですよ。自己効力感を積み重ねられるような問いも大切にしたいですね。

心理的安全性が担保された教室に

数学 生徒の思い込みをなくし、何でも発言できる雰囲気づくりも重要ですよ。教師が数学を使わなくても考えられる問いを出しても、生徒は「数学の授業だから」と、数学で考えようとしがちです。

理科1 「間違いは許されない」と思い、自分の考えを発言できない生徒は多いと思います。「正解を言わなきゃ」と思うあまり、思考を停止してしまう生徒もいます。

理科2 「間違ってもいいんだよ」というハードルを下げて、心理的安全性を担保することも、問いに取り組むやすくするためには重要ですよ。「ぱっと思いついたことを言ってみて」などと伝え、「なるほど、そう思ったんだ」と受け止めて、「生徒が発言してよかったと思えるようにしないと。生徒の発言をスルーしてしまったら、「何を言ってもいいなんて嘘だ」と生徒は思い、次から発言しなくなってしまいます。

国語 先輩教師が、評論の単元なのに、「自分が気に入った文章を挙げてみましょう」と問いかけていました。自分の好きな内容で答えられるので、どの生徒も意欲的に発言していましたし、とても温かい雰囲気での授業でした。

理科2 本校の生徒の授業評価アンケートには、「何を言っても先生は受け止めてくれるか」という質問項目があります。結果を見ると、教師主導の授業をする先生は、その項目の数値が低いんですね。教師の評価項目になっているので気にする先生も多く、授業改善に役立っています。

理科1 生徒が間違えたときの対応こそ重要ですよ。例えば、なぜ間違ったのかを解説し、間違いがみんなの役に立つといったことを、教師が生徒にフィードバックすることで、間違いを恐れずに発言できるようになるかもしれません。

大切にしたいフィードバックとリフレクション

理科3 確かに、今回の実践では取り上げませんでしたが、生徒から想定外の答えが出てきたときに、どのようにフィードバックするかは非常に重要ですよ。○か×か、AかBかだけでなく、条件によって最適解は異なりますから、異なる答え

が出てきたときは、そういう見方を育むチャンスです。

理科1 先生方は、問いの答えをどの程度想定していますか？ 私は、次の問いにつなげるために生徒の答えを予想しておきますが、そうすると授業の流れが予定調和になりがちです。

数学 想定はしておきますが、生徒から想定外の答えが出てくるほうが楽しいですね。「先生も分からないなあ」と言うと、生徒は喜んでいろいろ意見を出してきます。「じゃあ、一緒に考えよう」と、教室全体で考える雰囲気になり、生徒の思考が活性化します。

地理歴史 授業がうまいと思う先生は、別解のある問いを出しています。考えは一人ひとり違ってよいはずですし、それを共有することで生徒の思考が広がります。

理科3 私が思うに、論理的思考は順序立ててつなげればよいので、受動的にでも考えられますが、対立や矛盾といった異なる要素が入ると、考えを成立させるために能動的に考えざるを得ません。そうした場面を授業に意図的に設けることは、生徒が主体的に考えるために大切だと考えます。

理科2 私の理想は、生徒が自問自答して、考えを深めていくことです。教師が投げかけた問いをヒントにして、自分の考えを深めていき、そこから次の関心や疑問が生まれ、自分の中で問いを生み出すということです。

地理歴史 授業では扱いきれませんが、面白い問いはたくさんできると思うのです。例えば、「現在の日中関係のあまりよくない状況は、いつから始まったのか」という問いには、多様な着地点が考えられ、考える過程で歴史の見方が養われます。

理科2 きっかけや転換点を問いにするのはいいですね。プロセスを振り返る過程で全体を俯瞰することにもつながります。例えば、自分がそう考えた転換点を探るというのも、自分自身の学びを俯瞰することにつながります。

理科3 それは、リフレクションの重要性を指摘するものです。授業でもリフレクションをすることで自分の考えや疑問を整理することができ、次の問いに結びつきやすくなります。

理科1 ある先生は、探究学習の問いの設定からまとめの発表まで、プロセスごとに振り返りを記入させ、それにコメントを書いていた。中間発表や最後の発表だけでなく、細かく評価の機会があることで、生徒はそれを目標に学習を積み重ねていました。

理科3 教師が導いて発見させるというより、フィードバックをして、何を学んだのか、どういった気づきがあったのかメタ認知を促し、生徒が自ら発見する学びにしているのですね。自ら問いをつくって深める生徒を育むために、今後もこのテーマを話し合っていきましょう。

NEXT STEP — 「C」の問いをどう深めるか？

ワークショップを通じて、先生方は「C」の問いの大切さがわかってきたと同時に、「C」の問いをどのように深めていけばよいのか、また、Eフェーズの問いにどうつなげればよいのかなど、新たな疑問がわいてきたようです。その中から、問いづくりを進めるための道標となりそうな疑問を紹介します。

新たな問い～モヤモヤ感・先生方と共に考えたいこと

- 国語の教材を用いて各単元で考えさせることが、学校での1年間や3年間の教科の学びへと蓄積できたり、他教科の横断的な学びへと転用できたりするような問いが作れないか。(国語)
- How farの問いをどのような形にすると、単元を超えて問える問いになるか。(地理歴史)
- 「C」の問いなのか、「E」の問いなのか迷う。(地理歴史)
- 「E」の問いを「How」にするとどのようなものができるのか、生徒の様子や教科の特性を生かした問いにはどのようなものがあるか。(家庭)
- 「本当に正しいのか？」という問いかけは所与の解法

に疑問を持つ批判的思考力の育成や深い学びにおいて意味があることだと思うが、この問いはどのようなときに使うのが良いのか？（頻繁に使っても逆効果ではないかと感じている）(数学)

- 二項対立的な相対化ではなく、いくつもの視点や側面があって重層的に相対化でき、着眼点をもって焦点化できるようにするためには、どのようにするか。(地理歴史)
- 生徒に問いが生まれるような問いとは何か？ 良い問いかけをし続けていけば、生徒は自発的に問いを持つようになるのだろうか。(理科)